



# 君は満月のスポット ライトを浴びて

3月18日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 3月18日のおはなし「君は満月のスポットライトを浴びて」

君はそう、満月のスポットライトを浴びてそこに立っていた。

\* \* \*

どうしても細かい数字が合わず、全ての書類の金額を最初から確認する羽目になり、その作業が終わったのはもう終電の時間を過ぎていた。結局原因は一枚だけどうしたわけか消費税を3%で計算していたものがあったため、それが誰の仕業かわかるだけに（この部署で消費税が3%の時代に社会人だったメンバーと言えれば限られてくる）、煮えくり返るような腹立たしさを抱えつつ、おれは会社を後にした。

このままタクシーを拾って家に帰るのも癪だったので、一杯飲んで行くことにした。このあたりは官庁街で終電を過ぎるともう店などない。でも少し足を伸ばせば遅くまでやっているなじみの店がある。この付近でひときわ大きな公園を突っ切った先にその店はある。大きな公園には、ランチタイムともなると近くのビジネスマンやOLで賑わう大きな噴水広場がある。

都会のど真ん中とは思えないくらいこんもりと緑の生い茂る道を歩くと、一瞬自分がどこか山の中に迷い込んだのではないかという気がしてくる。実際公園の中程にはちょっとした高台が設けられていて、そこに至る坂道に踏み込むと、明るい昼間でさえちょっとしたハイキング気分を味わえる。ましてこんな夜中ならなおさらだ。おれは、どうせ何をするあてもないのだからと、ぶらぶらその山道に踏み込むことにした。

街灯が途切れても足元にくっきりと影が落ち、道の左右に木漏れ日のような光がちらちら踊る。驚いて見上げるとちょうど頭の真上のあたりに満月が出ていた。ああ。思わず声を出してしまってから、おれはあたりを見回した。満月を見て嘆息を漏らしているところなど人に聞かれたら恥ずかしい。そう思って苦笑した。近くには誰もいなかったが、視界の端を何かが動くのをとらえた。目を凝らしてみるときらりと2つの目が光った。黒猫のようだった。

猫は好きなので、ちょっとかまってみようかという気持と、黒猫は不吉だという迷信がからみあってためらっているうちに2つの輝きは見えなくなり、もうそこにはいなくなってしまったようだった。おれが立っている道の真ん中は満月の光がくっきり落ちて妙に明るく、対照的に木陰は大層暗く見える。ふだんは迷信なんか相手にしないくせに、この時に限って考えてしまったのはその暗闇の深さに気圧されたせいかもしれない。

ほんのしばらく、その場に立ち尽くしていた。けれどすぐに、おれはそのまま高台の広場を目指して坂道を上り始めた。それがあの年の秋の夜のことだ。まさかあの黒猫がお前だったとは気づきもしなかった。

「君の口から会社で残業したなんて話を聞くと不思議な気がするよ」

いまとなっては自分でも不思議だ。あくせく働いて給料のことや貯金のことや、いずれするだろう結婚のことをあれこれ考えて暮らしていた日々がまるで夢のようだ。でもあの時はまだおれは記憶を奪われたままだった。人間の親に育てられ、疑いも知らずごく平凡な人生を歩んでいたんだ。

「でも平凡ではいられなかっただろうに」

平凡だったさ。彼らの手術は、つまり我々の眷属を人間並みに引きずり下ろす、ホモトミーと呼ばれる平準化手術はすばらしい成功を収めていたわけだ。あの20年ばかり、おれは人間の血が飲みたいなんてこれっぽっちも思わなかったし、普通の人間に比べて自分の力が何倍も強いなんて考えたこともなかった。人間たちに幻覚を見せたり、自分の姿形を変えてみせたりできること

もおとぎ話にしか思えなかったと思うよ。

「いまはそんな格好をしているくせに」

こうしていると楽だからな。そういうおまえこそ、そんなはしたない格好をしておれを誘惑でもしているつもりか。

「会いたかった」

おれもだ、と言いたいところだが、いま言ったとおり、あの20年間、おれはおれたちの眷属のことをファンタジー以外のものとしては考えられなかったんだ。すまないと思うよ。

「わたしは君のことを忘れたことはなかった。探し続けたし、見つけ出した時には狂喜した」

ありがとう。それがあの晩なんだな。あの年のあの満月の夜。あの夜のことはおれもくっきり覚えている。まだ意識は人間だったが、それでも忘れようもなくくっきりと。でも、がっかりしたろう？ せっかく見つけ出したおれがどこにでもいるようなつまらない平凡な人間に成り下がっていて。

「いいえ。君は、失われたころと変わらない君のままだった。わたしたちの導き手として眷属を率いていたころの君のままだった。わたしにはわかっていた。いますぐにでも再び力を取り戻して、このめちゃくちゃに荒らされた世界をわたしたちに取り戻してくれるだろうと。再び王座に君臨するだろうと」

そんな大層なものじゃない。

「言葉通りだ。わたしは君を探して探してついに見つけ出した。君は最後に会った20年前と少しも変わらない姿で、別れた時と同じ微笑みを浮かべていた。わたしには十分に劇的な登場だった。わたしたちの時代の新たなる始まりを象徴しているかのようだった。君は、まるで」

まるで？

「君はそう、満月のスポットライトを浴びて、そこに立っていた」

(「満月のスポットライト」 ordered by たいとう-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 君は満月のスポットライトを浴びて

<http://p.booklog.jp/book/46339>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46339>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46339>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.